

非暴力直接行動

NO. 141
'86
12/-1

発行・WRI(ウリ)水田考・大阪市あべの区旭町1-6-1307(647-4089)

war resisters' international - Japan group

白バラとカジ馬

ーカジ馬と運命論ー

水田 考

1 ゴッシーとハンス

「白バラは死なず」という映画を観た。
一九四二年、ナチス時代のミュンヘン。
だが、みんながみんなヒトラーに熱狂し、
政府を支持していたわけではない。いやな
感じを持っていた人はけっこういたのだ。
でもそんなことを表だっていえば、いつ、ど
んなこととなりぬ人が告げ口するかわか
らへんし、ちよつとまとめて切手を買った
だけでゲシュタポにマークされる世の中だ。
共産主義者だけでなく、文化人やりベラ
リスト、教会関係者までことごとく弾圧さ
れつくしている。それに自分の兄弟や友人



たちが召集され、いつ死ぬかという目に合いながら戦っているとき、ヒットラーやゲシュタポを憎んでも、戦争には勝ってほしいと思う国民感情というものがある。

そんな戦時下に、反政府活動をやるうというような人間は、よっぽどの主義者か、ひとなみはずれた強い信念の人にちがいないーと思うのがフツだ。

ところが、この映画の主人公である21才のゾフィーは、24才の兄のハンスとミュンヘン大学の校内でビラをまいてるところを私服に発見され、ゲシュタポに渡されて、ついにヤロチンで死刑にされてしまうのに、知的で明るく快活な女の子という以外、ことさら特別ではない。兄のハンスだって以前からの活動家とか、主義者とかいうわけでもない。

二人ともごくフツの学生で、それが、ひょっとした偶然みたいなことで活動に加わってしまう。つまり行動のものになっているのは、私らと同様に、主義とかイデオロギーとかいうものではない、いわばその「生き方」



とも云うものだ。だから、はじめから死刑を覚悟してやり出したのではなく、だんだんと、そうなってしまう。それはーいま私たちが、反席巻や、死刑廃止や救援やといったことをほんの片手間で自分でもそれほどのことをしているとは思っていないのに、ふと気がついたら履行がついてる、まいたビラや貼ったポスターが理由で突然ガサが来る、という状況とそれほど遠くない。

一九三三年ヒットラーが選挙で政権をとった前後と、三〇四議席をとった中曾根がやりたい放題をやり出しているこのごろと、何となしに時代の空気が似ているーとすると、私たちの明日は…

2 はじめのシーンの意味

この映画を観たあと

「こわいな？、運動なんか、いまのうちにやめとこか、と思った」とか

「たしかにエエ映画やったけど、捕まって最後は死刑ーというくらいに結末に胸がつまる。死刑カリゴせなアカンのが判ってたら、誰も運動ようせんようになるんとかう

※これをきつた封筒に貼付の使用済の手紙を切り取り、おいて時々、まためて返送を。古ゆきのコロンションに協力下さい。

か」といふ感想が出た。

とすると、ゾフィたちの最後は、見当はずれの状況判断からきた結末なのだろうか。

そのことで私には、「白バラ」の中でとくに二つのシーンが眼にやきついていて。

そのひとつは、ナチスの将校がミュンヘン大学で、全校生徒を集めて演説する場面。

「……ブスでもない女には、わがドイツ軍の将校をあてがう……」祖国ドイツのために、女は毎年一人づつ子供を産む義務がある……」

もうたまたま女子学生のなかから野次がとぶ。それにうづいてあ、ちこ、ちからヤジの声。男子学生も呼応してピーピーブーブー。ついに講堂はわれんばかりの大騒動。席をけって学生がどんどん出ていく。それを阻止しようと憲兵が長棒をふりあげてなだれこんでくるが、もはや手のつけようもない。こうしてナチス将校の演説はホイコットされてしまう。あの時代にこういう事実があったなんて想像もしていなかったが、きくと他にもこれに似たようなことがあったにちがいない。」

ふつふつ。このような事件は、ほんのちよつとしたきつかけで誰が主謀者というのでなく、みんながヤジ馬的にワイツと加わってくることで拡大し、勢いがつき、とどめようがなくなる。

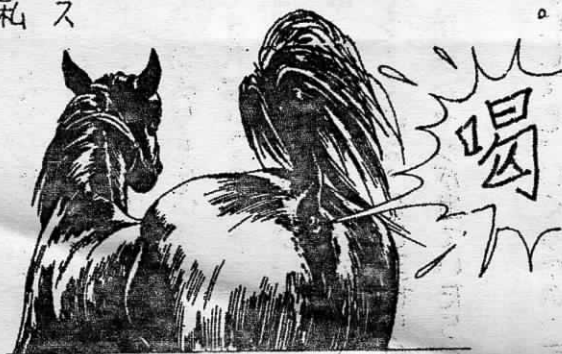
それゆえ、事件は、多少にかゝわらずハプニングである。そのハプニング性は、この場合ヤジ馬性といってもよいだろう。

つまり、そのヤジ馬性のために、ナチスも即座の対応ができなかったものにちがいない。

3 二つめのシーンの音心味

ところが、その野次馬性の積極的な意味をも消去し、まるっきりに対蹠的な否定的意味をもたらしものとして、もう一つのシーンがある。

それは、構内でゾフィとハンスがじろをまいているところを、私



服に発見され、連行されるときの光景だ。

まわりに学生たちがたくさんいるのに、誰ひとり助けようともしない。声ひとつあげる者もなく、たゞじっと見送るだけ。二人はとらえられ、ゲニユワポにひきわたされ、そしてついに処刑される。

これをみれば、誰もが、「ああやっぱりヤジ馬ではアカン。いざというとき全然アテになれへん」と、どうしようもなく暗い思いに囚われてしまう。

しかし又、そのとき、自分ならどうする、という答が出せない非力さを含めて、このシーンがヤジ馬の意味をまるっきり否定してしまう事例となるのかどうかは、よく考えてみる必要がある。



つまり、ヤジ馬の特質がワイワイガヤガヤ騒ぎ立てるところにあるとすれば、

このシーンに出てくる学生たちは、たゞだまって成行きを見守るだけの「ヤジ馬以前の」だからヤジ馬になりえなかった人たち「ヤジ馬でない人ら」といえるのではないか。もうひとつヤジ馬の特徴として何よりもその場に多数派をつくるということがある。とすれば、この場合、ひとりひとりのままだった学生たちはヤジ馬とは云えない。ゾフィーとハンスを連行する相手は、そのとき一人なのだ。こちらは大勢で、条件は充分そろっている。もしまわりから「なぜ? どうして?」という、抗議のヤジが出ていたらどうなったろうか……

それは、事態の解決ではないにしても、いくつかの「可能性」をつくり出すものにちがいない。

4 運動の中のヤジ馬の意味

いいかえると、このような絶対的状況を打開できるのは、一そのときとつさにみんながヤジ馬になれるかなれないか——それこそ日頃からヤジ馬根性をめいめいがたしかめ、積極的に自認しておく、その心がけしだい、といえるのではないか。へすくなくとも私は、もしそういうような場に居

※ 読後の感想・反論・質問歓迎——あなたのハガキをおまちします。

合せたら、おもわずでも何でも声をはりあげてしまう最初のヤジ馬になりたい。それをにがけたい。それがこのシーンをみたときの私のヤジ馬によけるおもいだ。

（そこであえて「ヤジ馬以前のヤジ馬でない人たち」とことさらに強調するのは、もしそのとき、何らかのきっかけでその人らがヤジ馬になったら、事態が一変する。という一その可能性ゆえにはかならない。そのように、ヤジ馬は誰もかいつでもなりうる無条件さをもとえている。）

このように、どうしようもない固定した状況を転換させる、いわば思いもかけない登場者として、決定的な力をもつてその場面を担うのは、いつだってその時その場所に居合せてヤジ馬だと私は思う。

その場にヤジ馬が登場するか、しないか、そのヤジ馬がどう動くか、がたぶんその状況転換の可能性であり決め手である。

そしてヤジ馬のそのような可能性を積極的にとり込むことかまた運動の可能性というものだと私は思う。

5 ヤジ馬五十歩百歩論

ところが、こんなヤジ馬についての考え方は、いささか特殊で、とくに運動ではなかなか通用しない。

一般的なガイ念としての「ヤジ馬」は、それこそ文字通り「ヤジ馬根性」のたよりなさ、気まぐれの無責任、行動のいかげんさ、ということだろう。その場合、明け、放しの気安さ、身軽で気楽な行動性、好奇心、調子のよさ——といった積極的意味をもつものも、運動の中ではマイナスに数え立てられる。

たとえば、さきのQ・14千人集会をへ反日ヤジ馬大博覧会へと名付けたとき、やはり「ヤジ馬とは……」という拒否的反応が一部からでた。異論はもちろん仕方がないところだが、その中で

「すくなくとも向井や水田自身は、ヤジ馬である筈がない。そのヤジ馬でないものが、参加者みんなを、きみらはヤジ馬だ、というのは失礼ではないか」



という点だけにはすこし反論してみたい。

（ここでいうヤジ馬とは、他者へあるいは問題へのかゝり方についての、自分の位置、その位置からの、かゝることにへの自己責任のつけとめ方、とり方のことだろう。とすれば、いま、私自身、東アジア反日武装戦線とのかわりにおいて、やはりヤジ馬の域以上を出るものではない。たしかに私は、虹の会のメンバーとして何耳か動いてきている。その点では、東アジア反日武装戦線について、ふつうのヤジ馬以上にかゝわりをもち、事情にも多少は通じている。

だから、もしいわれているヤジ馬がヤジ馬でないかの差異が、親疎、遠近や、おもいの度合の問題だけにとどまるなら、私はヤジ馬ではないかもしれない。

しかし自分をヤジ馬でないこと云いうるには他の誰にも断絶せぬ自分自身の責任として、全的にどのようなとりくんでいるかの、主体的確認以外にはないだろう。

そして「東アジア反日武装戦線」



線と私と、その関係は——と自ら向うならば、最後に私もまたやはり、いわゆるヤジ馬と呼ばれる人々と五十歩百歩の、「私もヤジ馬だ」と言うほかない。

（一別箇の、ある事柄に關してそれを云えば、明らかに私はヤジ馬で、人もそうみなす。つまりは、自分自身直接のこと以外、出発点へ正確に云えば対象との位置・距離）はいつもヤジ馬である。そして、その位置・距離は変転しちぎまり接近するとしても、最終的に、誰も自分と代りえず、自分も又他と一体化しえないように、ヤジ馬であることとを容易に、遂に超えられない？）

6 千人集会の可能性としての ヤジ馬運動論

へ9・14反日ヤジ馬大博覧会は、東アジア反日武装戦線に対する最高裁判決の死利確定——その予告を意味する口頭弁論日11・7の指定通知——という差迫った状況のなかで、へ千人集会への達成として提起された。

この誰の目からみても不可能な、へ千人集会という常識を超えたへ提起は、あえて、その絶対状況のなかで自

分をヤジ馬といらざる直る(こと)での、ギリギリのヤジ馬性を、
自他のなかへ追及することに可能性を賭ける―ものにほか
ならなかった。

いいかえれば、ヤジ馬以前のヤジ馬である、千人のなか
の、自分もその千人分の一である一個のヤジ馬として、何
よりもまず「はじめに自分が叫び声をあげる―、ただそ
の二つのみずべてを尽して、やれる限りをやる―という
ことだけが、私のはじめから終りまでの役割だった。

いま、その達成の結果をふりかえって云うならば、次の
ようなことがあきらかだろう。

1. 一般的には近づく難い「東アジア反日武装戦線への
大逆罪判決、天皇制裁判を許すな」というきわめて深刻な
政治的課題が重ければ重いほど、かえってヤジ馬とみずか
ら名乗る自己規定の強調は、逆に参加の気軽さ、関係の
無条件性、責任の自由さ、集会の開放的明るさとしてのエ
ネルギ―となった。

2. いままで常に運動から見捨てられていた部分―また自
分もそれと無縁としていた人々を、とくに「ヤジ馬」をか
かげる(こと)で呼び出し、さらに個としてのヤジ馬「千人の

一」の意味を、おのずから意識裡に浮かびあがらせるもの
となった。ヘ「千人の一」の意味については、他に何とも
書いたので、ここでは省略し

3. そのことにおいて、千人集会の達成をふくめ、いま
の運動状況打牢の可能性が、改めてヤジ馬と呼び呼ばれる
人々への積極的な「信頼」と「期待」に賭ける以外にはな
い―ということの是非をも明らかにした。

4. それは又、自分をヤジ馬とすることで、自分にも賭
けることであり、ヤジ馬の積極的意味を改めて提起する(こ
と)に外ならなかった。――

＊はじめはヤジ馬のつもりだった。それでイイ気になっ
てたら、いつの間に前面におしだされていて、おまえも
幸福秋水の一味なんやろ、

と気がついてたら絞首台に
たたされていて、一九二二年

(明治三十四年)仕方ないな

ヤジ馬してしまっ、たんや
から、とつぶやいて死ん
でいった、大石誠之助



のことを、ふと思ひ出しながら、これを書いていた。

その「誠之助」のことを考えると、はじめから死刑を力クゴでやるというのでは決してなくて、そんな状況について身をおいてやってしまふということがヤジ馬の根性なんだと思う。自分のヤジ馬に賭けるとは、またその意味でもある。

ソフィーやハンスの生涯も、それを私に教えてくれる。というのが「白バラは死なず」の私の感想である。)



▼ 140号を出したのが
84年の8月。2年以上
も出さなかったこと
になる。はじめのうち

にかかっていたけど、しだいに気にならなくなり、もうこれはおしまいにしようと思っていた。それを突然思ひ出したような今号の発行は9月に触発されたこと。「非暴力直接行動」というタイトルが少しきまじめすぎるし、実はいウリのメンバーとい、でも私と向井さんの二人きりみたいなもので、機関紙というていさいをやめて新しく個

人通信として発行しようかなと思つたのだけど、やっぱり気ばって同じスタイルで出すことにした。

▼ 水田考というのは、私と向井さんをくっつけた名前である。二人の合作で運動論を書いていこうというのが、これを出すはずになっていた。

▼ 東アツア反日武装戦線に対する最終口頭弁論が2月3日に述べた。それをさらに延期させるためのあらゆる手段をつくしたいとい、ても何が出るか。松下竜一さんの文芸の「狼煙を見よ」、たけもとのぶひろさんの豆本「死刑囚・彼」、荒井まり子さんの「子猫千びん」と地しはりの花は、どれも読む人の心を強くとらえる作品だと、私は確信をもって人にすすめることができる。これらの本を一人でも多くの人たちに読んでもらうことを「運動」として取りくみたい。

▼ 「非暴力直接行動」の講読者になってください。イオム通信も同封で、毎週、千五百円以上のカンパです。ぜひ。

▼ あさひまちウリ事務所のあたりは、もうすっかりようすが変わってしまった。世も末だ。

(風)